



## 時の流れと数々の思い出

カナダ・サスカトゥーン市在住

高谷 尚子



ホテルから見たナイアガラの滝

子育てがひと段落して、カナダで働き出したのが、1991年1月。1週3時間の臨時雇いからスタートして、1週37.5時間のフルタイムの時代を経て、今は自ら望んで、1週30時間、1カ月合計120時間のノルマをこなしています。が、同僚が病気になったり、法事で国へ帰ったり、夫婦喧嘩、児童虐待などの緊急の呼び出しがあったりで、時としてオーバーしてしまうと、そのオーバー時間の1.5倍が休暇となります。今回は丸々1週間の休みが認められ、主人の国際学会参加に同伴して、ナイアガラに出かけてきました。

4回目の訪問ですが、今回は子供や親戚や友人たちの案内義務もなく、まったくのフリー旅行で、ナイアガラの滝を宿泊ホテルの31階から眺めるといっておまけまで付きました。もっと安い部屋を予約してあったのですが、トロントからレンタカーで着いたのが午後1時。「チェックインは午後3時で、待って欲しいが、滝の見える最高

級の部屋なら今すぐにも…」と言われ、それが商法と知りつつ、便乗することにしたのです。車で2時間ほどの所に長男一家が住んでいます。「もう来る事はあまり無いな？」と二人で妥協、同意した次第です。

前回は滝のツアーや名所案内めぐりに終始しましたが、今回はノンビリ、ドライブを楽しみ、穴場？を満喫しました。いかにも英国風のナイアガラ・オン・ザ・レークや、エリー湖畔の対岸に、数年前、札幌の友人の息子さんの結婚式参列で出かけたバッファローの街が見えました。その友人も鬼籍に入り、息子さんも離婚と再婚を経ていて、時の流れと数々の思い出に、しばし感慨無量でした。

ナイアガラの帰途は、息子一家の住むキチナーを訪ね、日本語学校の発表会も観覧しました。私の住むサスカトゥーン市もそうですが、多文化保護推進政策のお陰で、伝承言語学校は各市に20数校あって、その発表会は大変に意義

深いものです。7歳の孫娘も浴衣を来て舞台上で嬉しそうでした。民族衣装というのは着る方も、見る方も、心に響くものがありますが、異国に住んでいるから尚一層愛国心を煽られるのかもしれない。

我が家に戻ってまもなく、隔年行事の北広島国際交流団が到着しました。視察団が見えてから17年の歳月が流れましたが、毎回優れた高校生を選び教育して送り出して下さる市教委や交流協議会はじめ、多くのボランティアの方々に脱帽です。私的機関に応募して1年間の予定でやってきた留学生のカウンセラーも乞われて引き受けていますが、道産子は礼儀正しく、根性にも積極性にも富んでいます。張り切ってスケジュールをこなし、涙を流してホストファミリーと別れを惜んでいる姿を見ると、今後とも、末永く続く様願わざるを得ません。



北広島高校訪問団と地元高校生たち



キチナーの語学学校発表会